

村の兄弟

小川未明

青空文庫

ある田舎いなかに、仲なかのよい兄きょうだい弟いがありました。ある日ひのこと、兄あには、一人ひとりで重い荷おもを車くるまにのせて、それを引ひいて町まちへ出でかけてゆきました。道みちすがら兄あには、弟おとうとのことを頭あたまの中なかで思おもっていました。頭あたまのいい、やさしい、いい弟おとうとだ。俺おれはこうして働はたらいても、せめて弟おとうとだけは、勉べん強きょうをさせてやりたいものだ。」

などと考かんがえていました。そして、ガタ、ガタと車くるまをひいてきかかりますと、あちらの松まつの木蔭こかげに見慣みなれないおじいさんが休やすんでいました。

おじいさんは、荷にをつけた車くるまが前まえにさしかかると、

「もし、もし。」といって、車くるまを呼よび止とめました。

兄あには、なにごとがあつて、呼び止めたのだらうと思つて、額ひたいぎわに流ながれる汗あせをふいて、おじいさんの方ほうを向むいて立たち止どまりました。

「私わたしは、旅たびをするものだが、足あしが疲つかれてしまつて歩あるけないから、どうか、その車くるまに乗のせて町まちまでつれていってくださいませんか。」と、おじいさんはいったのです。

兄あにはいつもならわけのないことだと思おもいました。しかし、今日きょうは特とくべつにおもひに重おもい荷にをつけてきたので、このうえ人間にんげんを乗のせるといふことは難なん儀ぎでした。

「私わたしににおおもひは重おもいのですが、この後あとから軽かるそうな荷にをつけてきた人ひとにお頼たのみくださいませんか。」と、兄あには答こたえました。

すると、そのおじいさんは、頭あたまを振りながら、

「この前まえにいった人ひとにも頼たのんだら、いま、おまえさんがいったよ
うなことをいって断ことわった。そういわないで乗のせてくださらないか
。」と、おじいさんは頼たのみました。

兄あには、つくづくそのおじいさんを見みましたが、身からだ体が小ちいさく、
あまり重おもそうでもないようですから、

「そんなら、乗のせていってあげます。そのかわり、そう早はやくは引ひ
かれません。」と、おじいさんを抱だくようにして、助たすけて、
車くるまの上うえに乗のせてやりました。

おじいさんは、車くるまの上うえに乗のつてたいそう喜よろこんでいました。

「人にんげん間げんというものは、だれにでもしんせつにするものだ。みんな

なが、そう心こころがつきさえすれば、世よの中なかはいつも円まるく治おさまるのだ。
。「というようなことを途みちすがら、おじいさんは、車くるまの上うへで話はなしを
いたしました。

やがて、車くるまが町まちに入りはいりました。すると、おじいさんは、

「もう、ここでいいから降おろしておくれ。」といいました。兄あには、

そこで、おじいさんを抱だいて降おろしてやりました。おじいさんは、
兄あにに向むかつて礼れいをいいました。

「私わたしは、旅たびから旅たびへまわつて歩あるく人間にんげんだから、べつに、お礼れいと
しておまえさんあににあげる金かねはないが……。」といいました。

兄あには、こういいかけるおじいさんの言葉ことばをさえぎりました。

「私わたしは、そんなものをいただく気きで、あなたを車くるまに乗のせてあげた

のでありません。「といいました。

「いや、ようしんせつに乗せてくださった。私はここに良薬
 を持つている。この薬さえめば、どんな病気でもなおらない
 ことはない。この薬はどこを探したってない。私は、支那から帰
 った人にもらったのだ、この薬をおまえさんあげる。この薬は、
 もう助からないというときでなければのまないで、しまっておき
 なさい。」と行って、おじいさんは、一ぷくの薬を兄にくれたの
 であります。

ほかの品とはちがい、これをもろうとたいそう喜びました。そ
 して、おじいさんとは町の中で別れて、自分は仕事をすまして、
 やがて空車を引いて、我が家へ帰ってきました。

兄あにが留守るすの間あいだは、弟おとうとは、家いえにいて働はたらいていました。そして、重おもい荷にを車くるまにつけて、遠とおく、町まちまで引ひいていつた兄あにの身みの上うへをいろいろに思おもっていました。そこへ、兄あには、帰かえつてきて、今日きょう、不ふ思議ぎなおじいさんにあい、そのおじいさんを車くるまに乗のせて町まちへゆき、お礼れいに、いい薬くすりをもらつたことを話はなして聞きかせたのであります。「それほどの名めい薬やくなら、大だい事じにして、しまつておきましよう。」といつて、二人ふたりはそれを家かほう宝たうにしました。

そののち、幾いく月つき日ひかたつたのであります。この仲なかのいい兄きょう弟だいは、その間あいだ、せつせと働はたらいたのであります。

しかし、人にんげん間まはすべて、いつでも達たつ者しやでいるものではないありません。ふと、兄あにが病びよう気きにかかりました。弟おとうとは、どんなに心しんぱ

配いしたかshれない。

「兄にいさん、いつかの薬くすりを出だしておのみなさいまし。」といいまし
た。

「なに、こればかしの病びょうき気きは、じきになおつてしまふ。後あとにな
つて、また、あの薬くすりが必ひつよう要ようなときがあるだろう。」と、兄あには答こた
えました。

兄あにの看かん病びょうをしていた弟おとうとが、また、病びょうき気きにかかりました。
すると、兄あにはねていながら、たいそう心しん配ぱいしました。

「俺おれの病びょうき気きは軽かるいのだから、おまえこそ、あの薬くすりを出だして早はや
のんだがいい。」と、兄あにはいいました。

しかし、兄あにがのまないものを、なんで、弟おとうとがのむことがありま

しよう。弟は、苦しい中からも自分のことを忘れて、兄の身の上を心配しました。

村の人々は、この二人の仲のいい兄弟が、ともに病気で倒れているということを知ると、どんなに気の毒がったかしれません。そして、近傍のいい医者を経人も呼んでみせたり、いろいろと手をつくしてくれました。けれど、二人の病気は、だんだん悪くなるばかりでした。

「どちらの、命も保証することはできません。」と、その医者たちもいいました。

ほんとうに、こんなときに、いつかのおじいさんにもらった薬をのまなければ、のむときはないのでありました。

兄は、弟に向かつて、

「もう、二人は、このままでいれば近いうちに死んでしまうだろう。しかし、あの薬をのめば、助かるにちがいない。おまえは、俺よりも年は若いし、また頭もいい、これから勉強をすればりっぱな人間になれるのだ。そして、この世の中のためにつきすこともできるだろう。すぐれた人間が生き残つて、社会のために働くということは、けつして私事ではないのだ。どうか、おまえは、生きていて、そして、ふたたび昔のようにじょうぶになつて、俺の分まで働いてもらいたい。どうか、おまえは、あの薬をのんでくれ。」といいました。

弟は、黙っていました。両方の目から涙が光つて流れまし

た。

「兄さん、私は、死を覚悟しています。」と、ただ、それだけい
つたばかりでした。

ある日、弟は咽喉がかわいて、水を欲しがったときに、まだ、
そのときまで気の確かだった兄は、水の中に一粒の名薬を入
れて弟に飲ませようと思いました。しかし、弟は、それを悟って、
口を開けて飲まずにしまいました。

それからまもなく、二人は、前後して、この世の中から去って
しまいました。

幾年か過ぎた、ある春ののどかな日でありました。いつか兄
が車に乗せてやった不思議な老人が、この村へまわってきまし

た。そして、村人から兄弟の話をきいたときに、老人は感心しました。「その薬は、自分がやったのだ。」とは、口に出して、人々には語らずに、ただ、みんなに向かつて、「人間は、ただ生きのびたからといって、たいした仕事をするものでない。この兄弟のように、みんなの心に、いつまでも忘れられない教訓を遺せば、それでりっぱなものだ。」と、老人はいいました。

村には、ちょうど、桜の花がみごとに咲いていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「村《むら》の兄弟《きょうだい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

村の兄弟

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>